

一志つぼく代廿四文

シツボタ 温餃ノ上ニ、焼雞卵蒲鉾椎茸クワヒノ類ヲ加フ、

一あんべい代廿四文

アン平

右ニ同ク加之、葛醬油ヲカケル也、

一けいらん代卅二文

鷄卵

温餃ノ卵トジ也、

一小田卷 代卅六文

ヲダマキ

シツボクト同キ品ヲ加ヘ、雞卵ヲ入レ蒸シタル也、

月 日

用捨箱〔下〕温餃の看版 芹川

昔は温餃おこなはれて、温餃のかたはらに、蕎麥きりを賣、今は蕎麥きり盛になりて、其傍に温餃を賣、けんどん屋といふは、寛文中よりあれども、蕎麥屋といふは、近く享保の頃までも無、悉温餃屋にて、看板に額あるひは、櫛形志たる板へ、細くきりたる紙をつけたるを出し、が、今江戸には絶たり、寛政の初までは、干温餃の看板に、櫛形の板に青き紙にて、縁などをとりたるを軒へ掛けたるが、たま／＼ありし歟○圖

桃の實 元祿六年

打かまねくか温餃屋の幣

吉原はわざともほどく茶筅髡

とあれば、吉原の温餃屋にも、此看板のありしなるべし、

下學集〔下〕飲食索麵

〔撮壌集〔下〕飲食索麵

〔饅頭屋本節用集〔左〕物索麵

〔易林本節用集〔左〕食服索麪

撰者 穴峯

嵐雪